

航空ファン

KOKU-FAN

ワイドカラー

WIDE COLOUR

陸上自衛隊

銀河



☆ 特集 ☆

カラーで見る U-2 と SR-71 戦略偵察機
現地ルポ 沖縄の航空部隊 ① 嘉手納基地
パイロット・レポート F-16 戦闘機

° 77 5
MAY

BUNRIN-DO JAPAN

\$3.30

航空ファン
別冊

第二次大戦の ドイツ軍用車両写真集

既刊“ドイツ戦車写真集”姉妹編

電撃作戦の主役として、華々しい活躍ぶりをよく知られたドイツ戦車隊、そして鋼鉄の戦士たち。しかし、これら名優を陰から支えた裏方たち、真の主役ともいべきものたちのことを忘れてはならない。

偵察や連絡に活躍した装甲車、オートバイ、補給や兵員輸送に泥まみれとなって働いたトラック、軽車両、そして強力な火炮を戦線まで運んで敵陣破壊に役だった牽引車など。

かれらは、ドイツ軍機動兵力の足として、ロシア平原から北アフリカまでの各戦線を駆けめぐり、戦場の陰の主役としての任務をりっぱに果たしたのであった。

かれら陰の主役であるドイツ軍の車両をすべて網羅した写真集が、ここに刊行される。“ドイツ軍用車両写真集”です。既刊の“ドイツ戦車写真集”の姉妹編として、あなたの座右の書となることでしょう。



好評発売中!!

B5判 総アート 167ページ(カラー8ページ、図版・写真満載)

定価 1,300円 送料160円

沖縄・嘉手納基地の航空機





前ページとこのページは、嘉手納基地に派遣されているT-38A。これはF-4の空戦訓練の際仮想敵機として使用されるもので、各機それぞれ異った迷彩塗装を施し、機首には大きく赤い番号が描かれている。右ページ上は、胴体下面にバルカン砲ポッドとECMポッドを装備して飛行する、第25戦術戦闘飛行隊（25thTFS）所属のF-4D。同じく下は離陸する第67戦術戦闘飛行隊（67thTFS）所属のF-4G。

T-38A's now on Okinawa. The variety of camouflage is reported for being used as hypothetical enemy aircraft in training. Note numbers in red on their noses. (Right & above) F-4D of 25th TFS, with Vulcan gun-pod and ECM pod. (Below) F-4G of 67th TFS.





戦略偵察機 U-2とSR-71

STRATEGIC RECONNAISSANCE PLANES, U-2 & SR-71



U-3と編隊飛行する練習型U-2C。デビスモンサン基地にある第100戦略偵察連隊（100SRW）所属機。

Trainer version U-2C, in flight with a U-3, from 100th SRW, Davis Monthan AFB.

(Caption by Mick Rabb)

(Photo by Mick Rabb)

着陸する100SRW所属のU-2R。

U-2R of 100th SRW about to land.





このページ上と中はビール基地の第9戦略偵察連隊 (9th SRW) 第99戦略偵察飛行隊 (99th SRS) 所属のU-2R。

(Photo by M. F. Henning)

(Photo by M. F. Henning)

U-2R of 99th SRS, 9th SRW, of Beale AFB, Ca.



9thSRW 1stSRSで慣熟飛行訓練に使用しているT-38A。垂直尾翼の帯の中にSR-71のシルエットが描かれている。

T-38A in practice at 1st SRS, 9th SRW. Note the SR-71 silhouette marking on the rudder.

(Photo by M. F. Henning)







(Photo by M. F. Henning)



(Photo by M. F. Henning)

着陸した9thSRW99thSRS所属のU-2C。U-2は簡便すると写真のように整備員が主翼に補助車輪を取り付ける。

U-2C of 99th SRS, 9th SRW. Groundmen rapidly fixed auxiliary wheels to the wing as a U-2C landed.

(Photo by M. F. Henning)



マクダネル・ダグラス F-15イーグル

McDannell Douglas F-15 Eagle



ルーク基地の第58戦術戦闘訓練連隊（58th TFTW）所属のTF-15A。手前の機体の機首にTAC-1と書かれているのに注意。

TF-15A of 58th TFTW, Luke AFB. Note "TAC 1" letters on the nose of the aircraft, this side.

58th TFTW所属のF-15A。F-15A Eagle of 58th TFTW.





主翼下に訓練用のサイドワインダーAAMを装備した58th TFWのF-15A。
 F-15A, equipped with Sidewinder AAM for training use.





58th TFW所属のF-15A。 F-15A of 58th TFW.

鑑別評価迷彩をした58th TFW所属のF-15A。
F-15A of 58th TFW in test-purpose camouflage



同じく鑑別評価迷彩をしたF-15A。 F-15A in the same purpose camouflage.

(Photo by Mick Roth)





ラングレイ基地の第1戦闘機連隊 (1st FFW) 所属のF-15A。
F-15A of 1st FFW, Langley AFB.





このページはオシアナ海軍航空基地で撮影したF-14A。上は第84戦闘飛行隊（VF-84）所属のF-14A。下はVF-41所属のF-14A。

F-14A of NAS Oceana. Above is F-14A of VF-84 and below is F-14A of VF-41.

(Photo by Jim Leslie)



(Photo by Jim Leslie)



(Photo by Mick Roth)

このページは、レムーア海軍航空基地で撮影した、アメリカ建国200年記念塗装のA-7 コルセアⅡ。上は第125攻撃飛行隊（VA-125）所属のA-7B。下はVA-122所属のA-7E。

A-7 Corsair II dressed up in US Bicentennial marking, photo taken at NAS Lemoore. Above is A-7B of VA-125 and below is A-7E of VA-122.



(Photo by Mick Roth)



アメリカ建国200年記念塗装をした、レムア海軍航空基地のC-1A。

C-1A in US Bicentennial marking, NAS Lemore.



アメリカ建国200年記念塗装をした、第3海兵戦闘偵察飛行隊（VMFP-3）所属のRF-4B。

RF-4B of VMFP-3 in US Bicentennial marking.

飛行テストを開始した シャトル・オービター

US STARTS SPACE SHUTTLE ORBITER CAPTIVE TEST FLIGHT

Photo by F.B. Mormillo



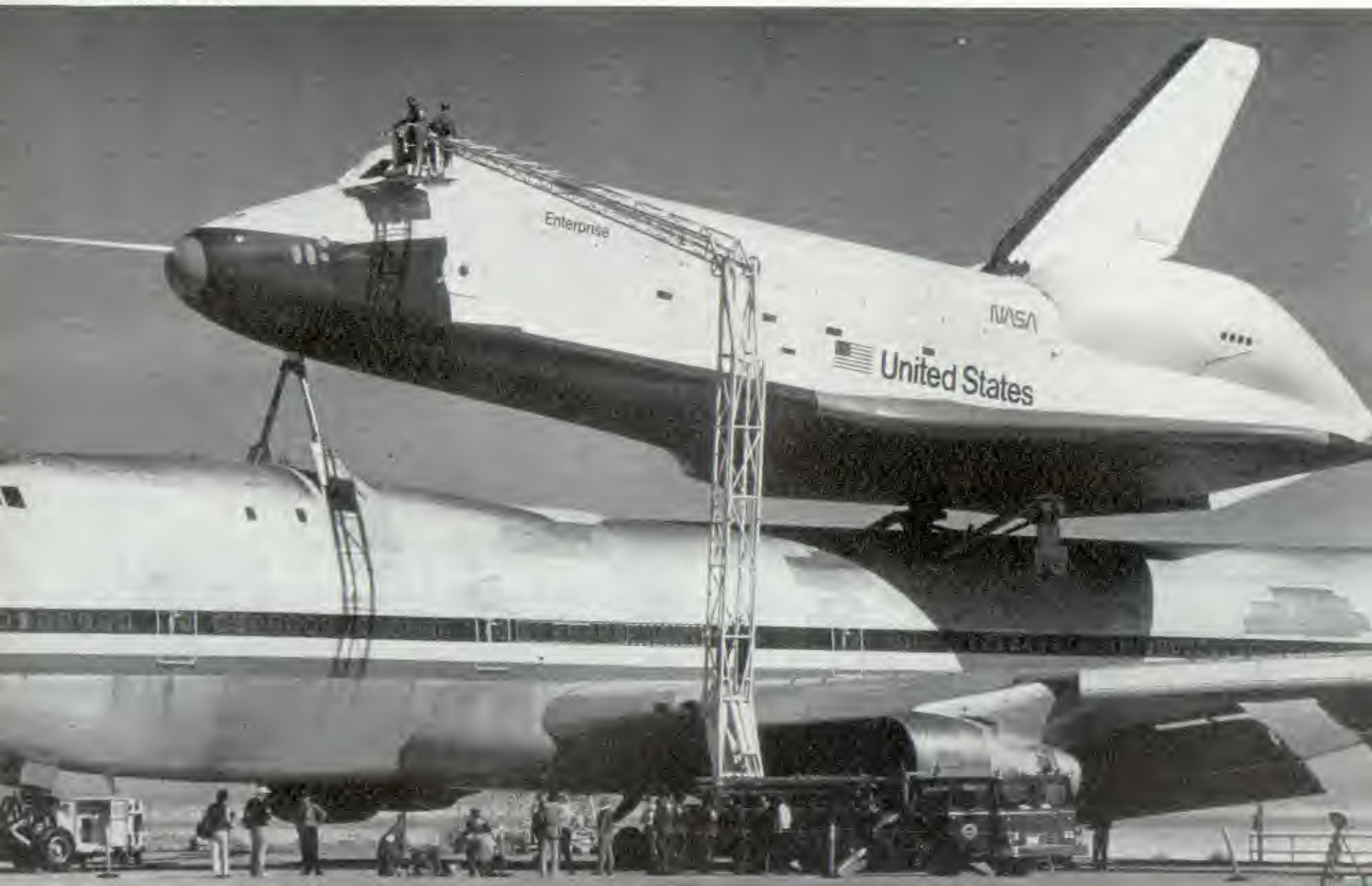


去る2月18日エドワーズの米航空宇宙局（NASA）テストセンターで、ロックウェル・インターナショナルの製作したスペース・シャトル・オービターが、ボーイング747改造機に背負われて、最初の飛行テストを行った。このシャトル・オービターは7月までにエドワーズ基地のドライデン・フライト研究センターで無人で6回、有人で8回のテスト飛行を行なう予定で、7月22日からは母機のB-747から切り離して着陸させるテストが始まる。

The first captive test flight of the NASA Space Shuttle Orbiter on February 18 was successful. The Space Shuttle Orbiter will probably undergo six unmanned and eight manned captive test flights from the Dryden Flight Research Center at Edwards AFB before it begins gliding tests. Starting on July 22, 1977, the Space Shuttle Orbiter will begin tests in which it will be released from the Boeing 747 carrier aircraft over Edwards AFB where

(Photo by NASA)

(Photo by F.B. Mormillo)





このシャトル・オービターは、アメリカの SF 連続テレビ番組に登場する宇宙船にあやかって「エンタープライズ」と命名されている。同機は5機製作されるシャトル・オービターの最初の機体で、実際に最初に宇宙船として宇宙にあがるのは2番機と思われる。

(Photo by F.B. Mermillo)

(Photo by F.B. Mermillo)

シャトル・オービターの尾部に付いているポートのようなフェアリングは、B.747の尾翼表面の空気の流れをよくするためのもの。B.747の水平尾翼に付いているフィンは、オービターを背負ったときの安定をよくするためのものである。





(Photo by F.B. Mormillo)

The first Space Shuttle Orbiter has been named the "Enterprise" after the spaceship featured in a popular US television series about future space exploration. Although the "Enterprise" is the first of five Space Shuttle Orbiters to be built, the first Orbiter to be launched into space will actually be the second craft built.

(Photo by F.B. Mormillo)



迷彩塗装でお目見え F-1 支援戦闘機



航空自衛隊が現在使用している、地上支援型のF-86Fの後継機として三菱重工がT-2練習機の発達型として製作しているF-1支援戦闘機に、迷彩塗装を採用することになり、去る2月25日にその迷彩機が公開された。これは米空軍などの迷彩色よりいくぶん明るい色で、下面はF-4EJの上面と同じグレイで、上・側面は、ダークグリーン、グリーン、タンの3色迷彩になっている。なお、航空自衛隊では、53年度からO-1輸送機、RF-4E偵察機にもF-1と同様の迷彩塗装を施す予定ということである。

On February 25, Mitsubishi opened to the public its camouflage of the F-1, a successor of the F-86F currently in use. The three-tone camouflage looks rather brighter than the USAF aircraft. ASDF reportedly considers undergoing similar three-tone camouflage on the C-1 and the RF-4E starting FY78.





F-1 は2月のロールアウトのあと、地上機能試験、飛行試験を行ない、9月に初号機を納入、10月に2機その後は毎月3機づつ、来年3月までに第1次契約分18機が航空自衛隊に引渡される予定になっている。

The F-1, rolled out in February, will be delivered to the ASDF in September, after various tests including flight tests. A total of 18 planes is expected to be delivered by March 1978.



F-1 CLOSE SUPPORT AIRCRAFT MAKES HER DEBUT IN OPERATIONAL CAMOUFLAGE



新型エンジンのテストをするYC-15

YC-15 TESTS NEW ENGINE

米・仏共同開発の新型ターボファン・ジェット・エンジン CFM-56を搭載、飛行するマクダネル・ダグラス YC-15。写真はロングビーチ空港を離陸する同機。これは YC-15AMSTプログラムのフェーズIIの開始を意味するものである。

Equipped with the new French-American CFM-56 turbofan jet engine, Air Force/McDonnell Douglas YC-15 prototype lifts off from Long Beach Municipal Airport, Feb. 77.

西ドイツ空軍で高官(VIP)輸送機として使用している MBB/HFB320ハンザを改造して、電子戦訓練機とした MBB/HFB320ECM。機首にレドームを張り出し、背部にアンテナを追加装備しているほか、後部胴体下にもレドームが出ている。

This is the MBB/HFB320ECM, a remodeled plane of the MBB/HF320 Hansa now in use by the West German Air Force as a VIP transport. The VIP transport carries a crew of nine, while this carries seven. Two radomes on the nose and under the fuselage and additional antenna are distinctive.

電子戦訓練機HFB320/ECMハンザ

HF320/ECM "HANSA"



米空軍嘉手納基地



現在沖縄の米空軍嘉手納基地には、太平洋空軍(PACAF)所属で第18戦術戦闘連隊(18thTFW)などからなる第313空軍師団、戦略空軍(SAC)所属の第376戦略航空連隊、軍事輸送空軍(MAC)所属の第33救助・回収飛行隊(33rdARRS)などの航空機部隊が駐留している。

Koku Fan Camera recently visited Okinawa, first to cover the aircraft of the 18th Tactical Fighter Wing. Various other air units including SAC and MAC are stationed Okinawa.

(本文65ページ参照)

AIRCRAFT UNITS ON OKINAWA : KADENA AB





このページ中と下は第25戦術戦闘飛行隊 (25th TFS) のF-4D。
This page (mid & bottom) is the F-4D of 25th TFS.



このページと右ページは、第18戦術戦闘連隊(18th TFW)所属のF-4D。同連隊にはF-4C使用の第67戦術戦闘飛行隊(67th TFS)、F-4D使用の第12、25、44戦術戦闘飛行隊、それにRF-4C使用の第15戦術偵察飛行隊(15th TRS)の5個飛行隊が所属している。

The 18th TFW includes five Phantom Sqs: 67th TFS (F-4C), 12th TFS (F-4D), 15th TFS (F-4D), 44th TFS (F-4D) and 15th TRS (RF-4C). This and right page cover the F-4D of 18th TFW.





増陸する44thTFSのF-4D。 F-4D of 44th TFS

12thTFS所属のF-4D。 F-4D of 12th TFS.





このページは、F-4の空戦訓練のため嘉手納基地に派遣されている米空軍のT-38A練習機。これらの機体は各機異なった色の迷彩が施され、機首には大きく赤い番号が描かれている。T-38は空戦訓練ではMiG-21と同じ様な飛行をするという。

T-38A trainers now in Kadena for combat training with Kadena-based F-4s. The T-38 reportedly shows a maneuverability like MiG-21 in training.





第376戦略航空連隊 (376thSW) 所属の KC-135 A。 KC-135 of 376th Strategic Wing.

第33救助・回収飛行隊 (33rdARRS) 所属の HC-130 P。
HC-130P of 33rd Air Rescue and Recovery Sq.



33rdARRS所属の HH-53 B。 HH-53 of 33rd ARRS.



戦略偵察機 ロッキード U-2



このページと右ページは、カリフォルニア州ビール空軍基地にある
第9戦略偵察連隊(9thSRW)第99戦略偵察飛行隊(99thSRS)所
属のU-2C戦略偵察機。

On this and right pages are the U-2C of the 99th SRS, 9th
SRW, based at Beale AFB, Ca.



(Photo by M. F. Hennin)

(Photo by M. F. Hennin)





(Photo by M. F. Henning)



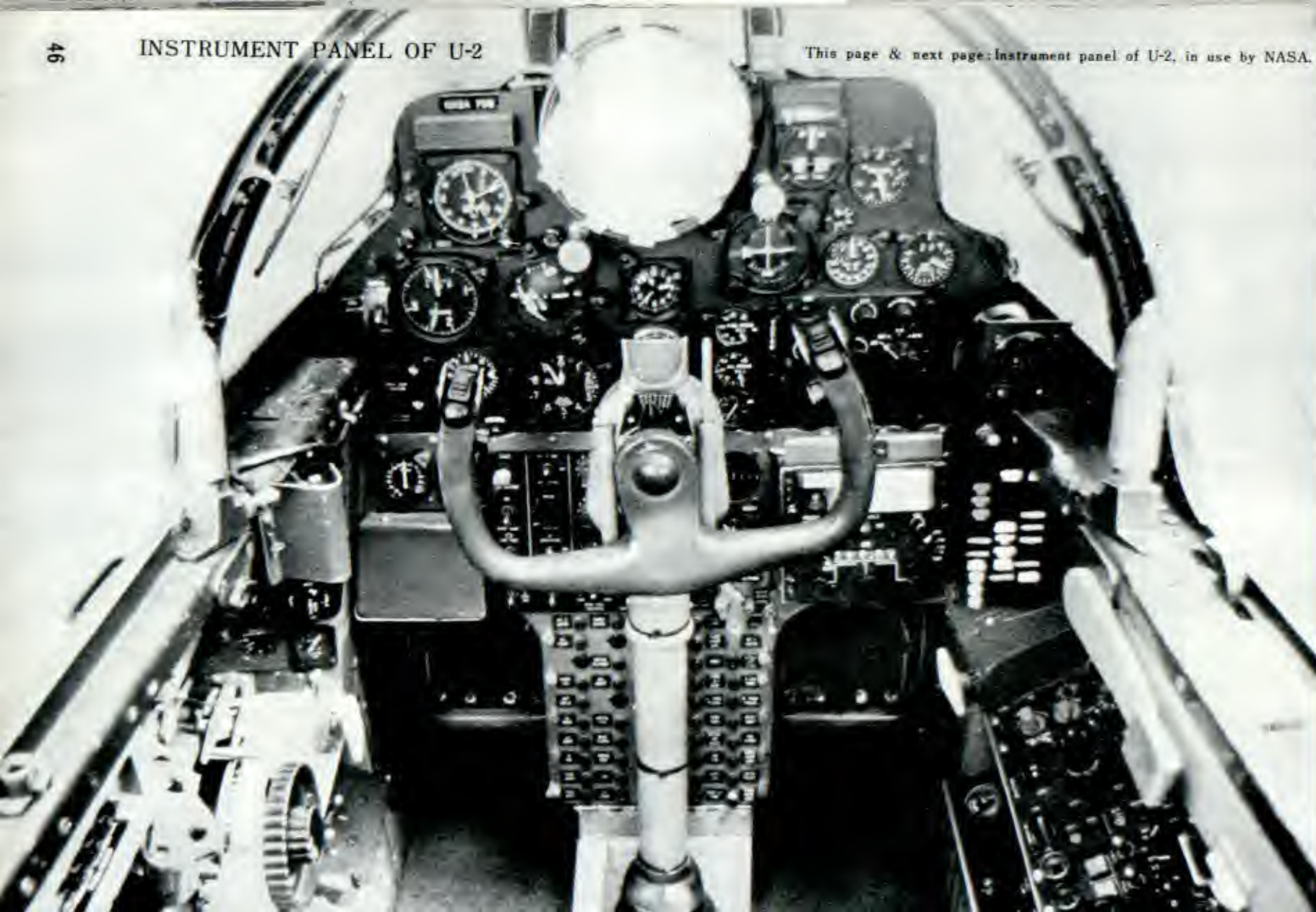
(Photo by M. F. Henning)

U-2は、1957年に戦略空軍（SAC）に編入された当時は、スパイ機として世界の注目を集めた高々度偵察機であるが、現在では主に高空の大気調査に使用されている。

(Photo by M. F. Henning)

The U-2 high altitude reconnaissance plane, incorporated in SAC in 1957, is now used mainly for air research of high altitude.

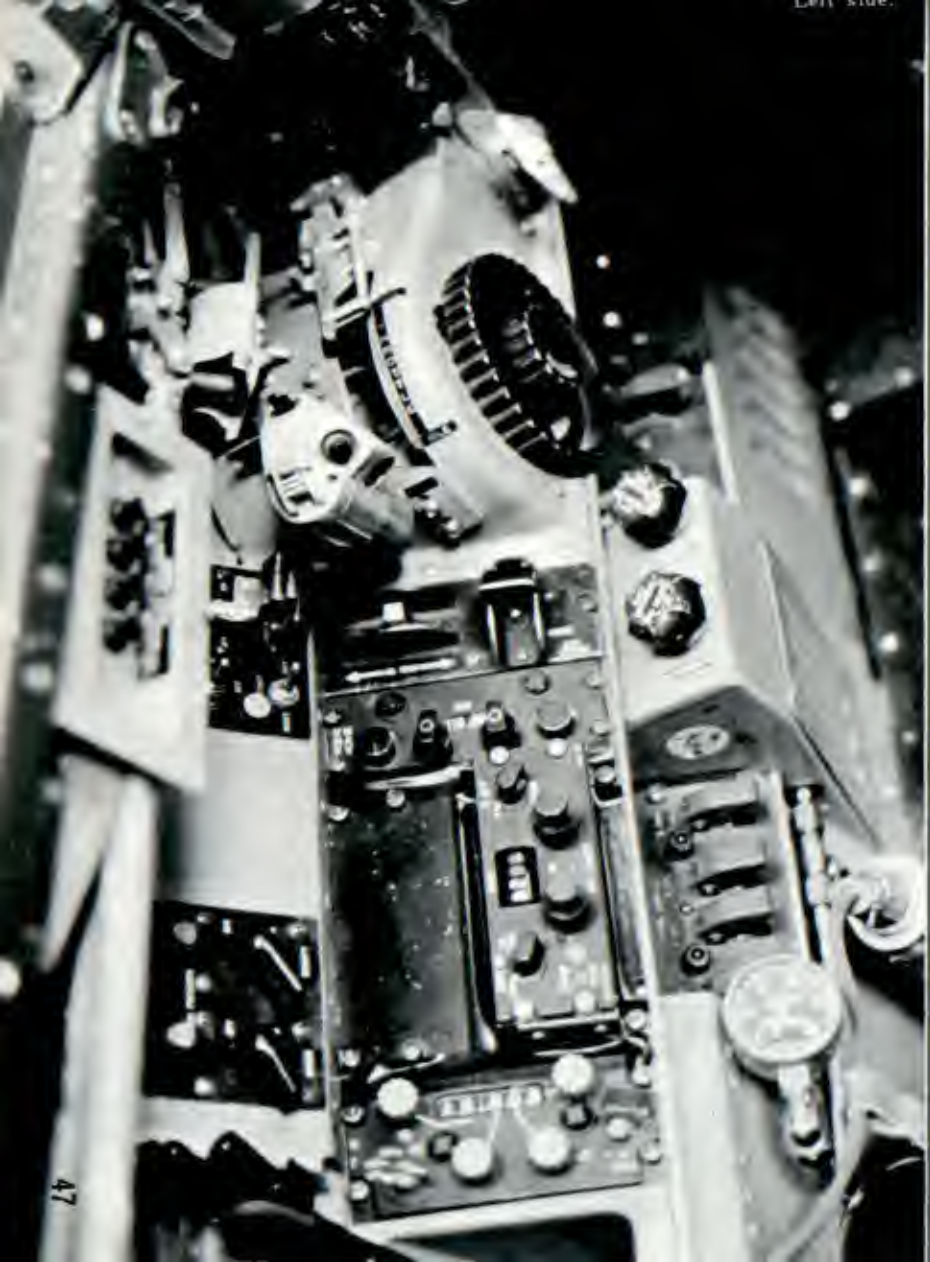




このページ
と次ページ
は米航空宇宙局（NASA）で
使用している
U-2の
機内計器



▲左側面パネル



▲右側面パネル



このページは、機首を長く改造し、機体全面を黒一色で塗装した99thSRS所属のU-2R。下はその細部写真。

Painted entirely in black, this nose-prolonged U-2R belongs to the 99th SRS. Details are shown below.

(Photo by F. B. Mormillo)



(Photo by F. B. Mormillo)



(Photo by F. B. Mormillo)



(Photo by F. B. Mormillo)





(Photo by M. F. Henning)

このページはビール基地の99th SRSに所属している機体のU-2訓練機U-2CT。

Trainer version U-2CT of 99th SRS, Beale AFB.



(Photo by M. F. Henning)

(Photo by M. F. Henning)





LOCKHEED / USAF

(Photo by F. B. Mormillo)

超音速高々度
戦略偵察機

ロッキード
SR-71A



(Photo by F. B. Mormillo)

(Photo by F. B. Mormillo)



このページは昨年10月
マーチ基地のオープン
ハウスに展示された。
ビール基地の91stSRW
1stSRS所属のSR-71
A。中の写真で、キャ
ノピー前のフェアリン
グは、高速飛行中の高
熱からキャノピーの方
ラスを保護するための
もの。下の写真では機
首下面の各種偵察バ
ック装備部のリンクが
うかがえる。

March AFB Openhouse
October 1976. SR-71A
from Beale-based 91st
SRW. Note the fairing
in front of the canopy
(in the mid), which
is to protect canopy
glass from high heat
while flying at a high
speed.

PHOTO NEWS



英仏共同開発機ジャガーの、マトラ R550マジック空対空ミサイルの実弾第1次テストが終了した。写真は、主翼上のランチャーからマトラ R550が発射された瞬間。



エールフランスと英国航空は、コンコルドを就航させて1976年の航空輸送産業に多大の貢献をしたことにより、このほど「エア・トランスポート・ワールド」誌から、恒例の「76年航空会社賞」を受賞した。写真はピレネー山脈上空を飛行中のコンコルド量産1号機。

フランスのツルーズにある、エアバス・インダストリーの塗装工場で機体塗装を終えた、ルフトハンザ向け A300 B2-4 番機。





(APN)



(TASS)



上はTu-134 A旅客機。中は夜のマーマンスク空港

創立50年を迎えた、ソ連で最も古い航空機工場の一つ、
ハリコフ航空機場で製作中のTu-134 A旅客機。



ソ連のオレンブルグにある空軍大学で、飛行訓練に使用されている、チェコスロバキア製シ-29練習機。



50年の歴史を誇るオレンブルグのボリジン・ソビエト空軍大学。世界初の宇宙飛行を成しとげたユリ・ガガーリン飛行士などがここで訓練を受けている。写真は正門前に展示されている、宇宙飛行士ガガーリンが訓練に使用したMiG-15。



スナップだより



マベリックミサイルを装備して嘉手納基地に着陸する。
第12戦術戦闘飛行隊所属のF-4D(春日井市 鈴木敏夫)。

1月下旬横田基地に飛来したVMGR-234所
属のKC-130F(昭島市 山内裕之)。



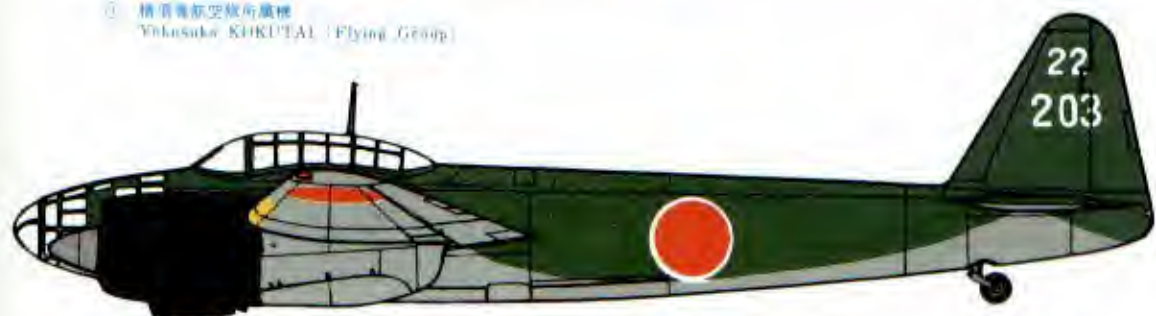
このほど海上自衛隊に引渡されたPS-1の18
号機(西宮市 梅原由美子)。



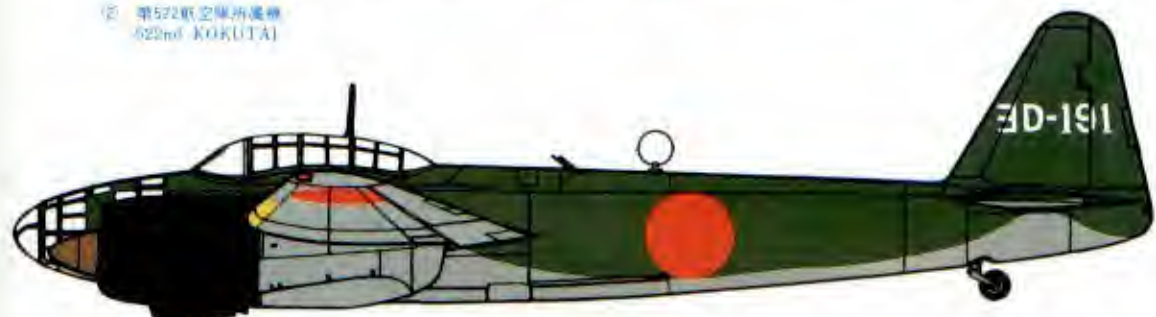
KUGISHO P1Y1 GINGA



① 横須賀航空隊所属機
Yokosuka KOKUTAI (Flying Group)



② 第522航空隊所属機
522nd KOKUTAI



③ 鶴河川型夜戦型、第302航空隊所属機
P1Y1-S Night Fighter, 302nd KOKUTAI



④ 第762航空隊所属機
762nd KOKUTAI



⑤ 第761航空隊所属機
761st KOKUTAI

© Kitashimoto



CURTISS TOMAHAWK/KITTYHAWK

カーチス トマホーク&キティホーク



Curtiss Tomahawk Mk.IIB of No. 414
"Imperial" Squadron, R.C.A.F.

二次大戦初期のアメリカおよび連合軍空軍の代表的な戦闘機であったカーチスP-40。製作あるいは頑丈で長持ちする戦闘機と、これほど評価がわかる戦闘機もめずらしい。高々度ではたしかに当時の第一線戦闘機に諸性能が劣り、空戦性能も悪かったが、低空性能はばつぐんで、当時としては強力な武装をそなえ、劣勢な連合軍をどうにか守り通した実力は評価すべきであろう。英連邦

空軍用に輸出されたトマホーク、キティホーク、米陸軍空軍用のウォーホークと、バリエーションを通じて三つのニックネームを持ち、約15,000機が生産された。

【左ページ+上+下】カナダ空軍の第414"インペリアル"スコードロンに装備されたトマホークII B。第414スコードロンは、1941年8月12日に戦闘偵察部隊として編成され、最初にトマホークを装備した部隊のひとつである。



第112“シャーク”スコードロンの キティホーク



Kittyhawk Mk.III's of No.112 "Shark" Squadron



北アメリカ戦線に派遣された英空軍第112スクアドロンのキティホーク機。同スクアドロンは第一次大戦中に本土防空部隊として編成された戦闘機部隊であるが、1938年5月に、中東方面担当の戦闘機部隊として再編成され、トマホーク、キティホーク、のちにはミスタルにも転換してスターダン、チュニジア、シシリー攻撃など、北アメリカ戦線でも闘っている。トマホーク以来、機首にきめ口のマークを画いた“シャーク”スクアドロンとして名を馳せている。



↑ Tomahawk Mk. IIB of No.414 Squadron.

〔上〕92-93ページと同じく、第414スクアドロン所属のトマホークⅡB。トマホークⅡBはP-40Dの輸出型で、初期のP-40の輸出型トマホークⅠにくらべると、燃料タンクの防弾を改良、主翼の7.7mm機銃を2挺ふやして、機首の12.7mm機銃2挺に加えて計6挺と強化されている。写真では主翼の収納やあいなどがよくわかる。

〔下・右上〕機首下にラジエターが張り出したP-40D以降の輸出型がキティホーク。英政府では、1940年5月に560機のキティホークⅠ（P-40D）を発注、1番機は翌41年5月22日に初飛行して英空軍に引渡されたが、写真

➡ Four replacement Kittyhawks of No.112 Squadron.

の機体はその最初のキティホークⅠである。P-40Dは主翼に12.7mm機銃を4挺装備していたが、のちに12.7mm機銃2挺を追加装備したP-40Eが造られて、540機発注されたキティホークは、MK.ⅠAとして、この機銃6挺装備の規格にして引渡されている。

〔右中〕英空軍の第112スクアドロンに引渡されたキティホークⅠA。同スクアドロンは、1941年末に、トマホークに代えて同機を装備している。〔右下〕正面から見たキティホークⅠA。

⬇ Kittyhawk Mk.Ⅰ in sand and stone camouflage.





誘導の整備員を翼の上に乗せて砂漠の誘導路
をタキシング。第112スコードロンのキティ
ホークIII。同スコードロンは、1942年10月か
ら44年4月まで、キティホークのIII型で闘っ
た。



同じく第112スコープロンズのキティホーク田とパイロット。砂漠のパイロットの服装がわかって面白い。主翼の12.7mm機銃には、砂じんを避けてカバーをかけている。





↑→ Kittyhawk
Mk. IAs of No.112
"Shark Squadron"

【上・下】戦場のキティホーク I A。アフリカ戦線に派遣された第112スコードロンの所属機。1941年末にキティホークを受領した112スコードロンは、翌年初めからアフリカのドイツ空軍機を相手に戦闘に入ったが、強敵Bf109の前には、犠牲も少なくなかった。オーストラリア空軍のキティホークと協力して、ドイツ空軍の有名な“アフリカの星”ハンス・ヨアヒム・マルセイユ中尉を擁する1/JG27(第27戦闘航空団第1連隊)のBf109と闘ったのもこの部隊である。同スコードロンはトマホーク以来、機首にさめ口を画いていた。写真上は砂じんをあげての編隊離陸。見まもるのは英軍の兵士。右の写真では、主翼下の40mm爆弾(計4発装備)、胴体下の250mm爆弾(2発装備)などがよくわかる。





ガンゼ産業Mr.カラー

ハイモデリングのための塗装マニュアル



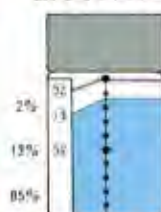
垂直尾翼のエンブレム



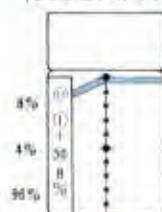
ガンゼ産業Mr.カラー 配合ガイド



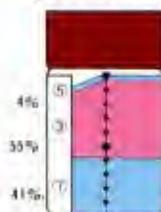
エグクラフト・グレー



インシグニア・ホワイト



インシグニア・レッド



配合ガイドの見かた

ガンゼカラーのピンをレイアウトし、色パターンは、左のナンバーがガンゼカラーナンバーで、中央の目盛りは混合率を示し、右の目盛りが10%を示しているが、左で述べているように厳密な混合率を示してあまり重要とはいえない個々の色感とカラー塗料上の個性という問題もあり、あくも、この混合率は目安、とお考え願いたい。

GD/CONVAIR F-106 DELTA DART

ウィリアム・テル'76参加のF-106
ADCOM第87戦闘迎撃飛行隊隊長機



機首左面のイラスト



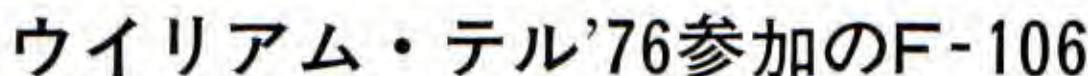
前脚カバーのイラスト



K. Hashimoto

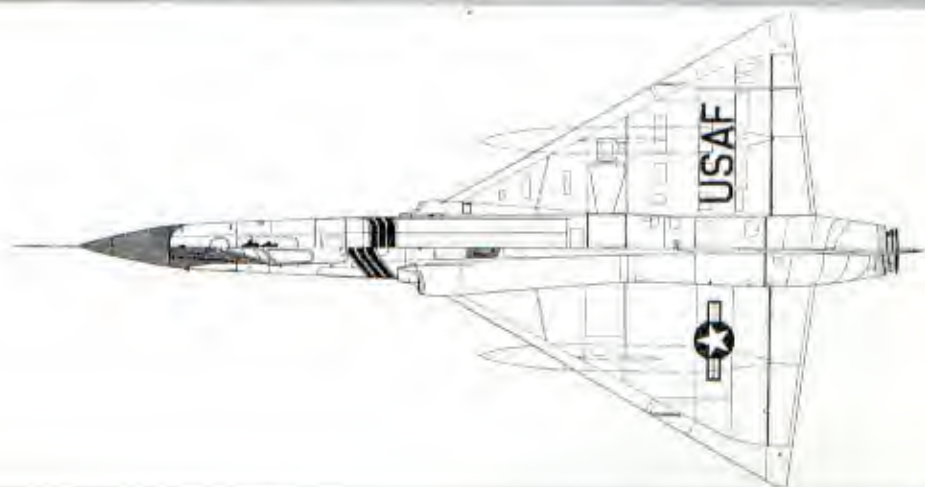
垂直尾翼左面のエンブレム





—ADCOM第87戰鬪迎擊飛行隊機

(イラストと解説・橋本嘉久男)



飛行テストを開始した シャトルオーガーにター

2月18日、エドワーズ空軍基地で「母船」のB-747に搭載されて飛行テストを開始したシャトル・オービターの「号機DV-101「エンタープライズ号」。1月からは空中でB-747から離されて、滑空試験テストを行なわれる。

(Photo by F. B. Mormillo)

DV-101 shuttle orbiter and its Boeing 747 carrier aircraft at Edwards AFB.





陸上爆撃機

銀河

NAVY BOMBER P1Y1~3 GINGA

〔上〕同主翼下に増槽を吊して整備中の「銀河」11型（P1Y1）。昭和19年3月1日に木更津基地で開隊した第522航空隊の所属機で、同航空隊の各機は、豊橋海軍航空基地で練成訓練ののち、第2航空艦隊に付属して、台湾沖、レイテ島攻撃などに投入された。〔下〕これも増槽を吊して発進する「銀河」11型。昭和20年初めに南方基地、おそらくフィリピンで撮影されたもの。





(上・下・右上・右下)いずれも昭和19年秋頃、フィリピンで撮影された「銀河」11型。フィリピンに派遣された「銀河」隊は、ルソン島クラークフィールドを基地に、同年11月3日を期して敢行されたレイテ湾および同島タクロバン飛行場の総攻撃に呼応して、爆装あるいは雷装でほとんど全機が消え去るまで出撃をくり返した。下の写真の機体は763空の所属機。

GINGA (P1Y1, Frances) Model 11, Photo taken in the Philippines, autumn 1944. History tells that Ginga's stationed at Clark Field, carrying bombs and torpedoes with them, took major role in an operation of November 3, 1944, attacking Takroban Airfield, Lyte. Most of them were then sacrificed, however.





長距離雷爆撃機「銀河」の思い出

三木忠直

「銀河」は急降下高爆撃機として380ノット(704km/h)の速度まで運用したが、その生涯で機体自身の原因による空中分解などの事故はいちども起きなかった。スキップボミングの訓練中、尾翼が分解し、墜落した事故がいちどあった。ちょうどそのとき撮影した高速度写真から、380ノットで演習爆弾を投下後、上昇しかけて、先に落した爆弾が高くジャンプして尾翼にあたったものとわかった。

実戦にあたっては「普」発動機の不調、燃料の質の低下、パイロットの技量の低下などから、所期の性能は充分発揮できなかったが、連合軍側の「銀河」に対する評価は、エアロプレーン誌の“remarkable clean design”との評や他誌の「時速350マイル(563km/h)を出す世界最高速爆撃機」としたもので、また米軍のいわゆるコードネームは“Francis”(フランシス)という優美な名を与え、

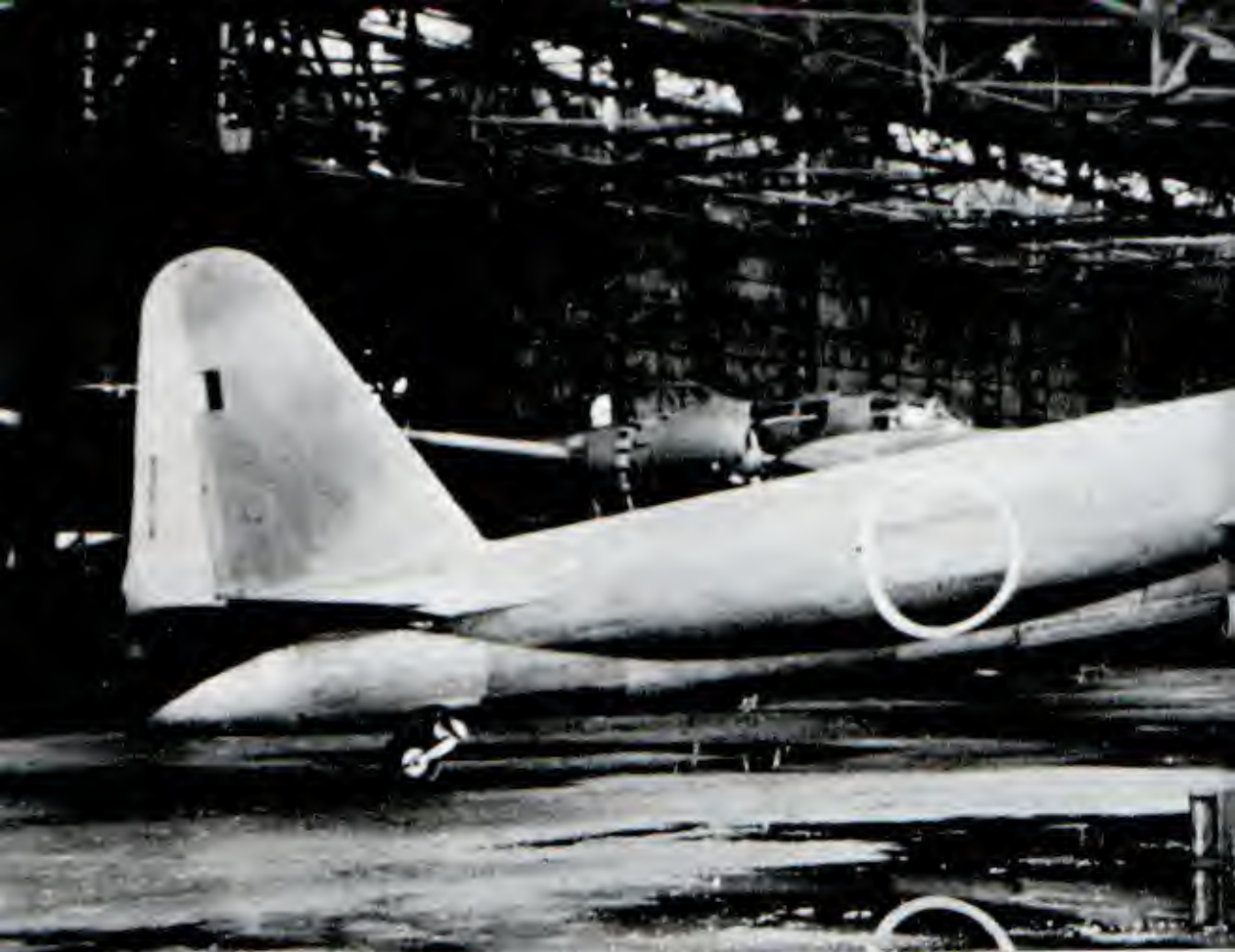
「紫電」・「彩雲」とともに新しい番機秀機の列に入っていたのをみれば想像がつく。

筆者は数年前、神戸に出張した折、駅から造船所に向かうタクシーで運転手と四方山(よもやま)の話をしていたが、やがて「私は戦前海軍で飛行機に乗っていました。こうして生きておられるのも『銀河』のおかげです」というので、筆者は思わず「ええっ」と体を乗り出し、「銀河はボクが設計した」と思いもかけず話がはずんだ。

「銀河」の急降下性能、運動性、それにその高速で敵戦闘機の追跡をより切って帰還したのです。山本元帥も「式陸攻でなく『銀河』に搭乗して行かれたら撃墜はされなかったでしょう」と語ったところで、事を語りねばならなかった。別れに手をにぎり、チップをはずんだのだった。

(77ページ本文記事参照)





〔上・右下〕中島の小泉製作所ハンガー内の「銀河」33型（P1Y3）。33型は11型の基12型エンジンを高出力の基21型に換装したもの。写真は終戦直後の撮影。〔下〕昭和19年に九州の笠ノ原航空基地で撮影した「銀河」11型。18年7月に鹿屋航空基地で開隊した第761航空隊の所属機で、この部隊もマリアナからフィリピン方面に投入され、大きな犠牲を出している。主翼下の落下増槽は容量1,120-L。

◆ GINGA Model 11 (PIVI), at Kasanbara Air Base, Kyushu, 1944. This is the plane of No.761 Kokutai, which was organized at Kanoya Air Base, Kyushu, in July 1943. This unit was later deployed in the Marianas-Philippines area. Note the 1,120 liter capacity drop tank under the wing.





GINGA Model 33 (PIY3) in Nakajima's Koizumi Works, Gunma Pref. Model 33 was an improved version of Model 11, with a change of powerplant from Homare-12 to Homare-21. Photo taken just after the war.



スミソニアン博物館の零戦

《続》



THE SMITHSONIANS ZERO

先月号「スミソニアン博物館の零戦」の本文記事で紹介してあるように、米海軍の技術諜報チーム(TA1)は、戦闘が終わったサイパン島の弾薬庫をいくつとって、日本機24機に分捕りに成功した。スミソニアン航空宇宙博物館の新館に展示された零戦52型はそのうちの1機である。ここに掲載したのは、分捕り後、船積みまでの様子を伝える写真である。

〔上・右〕日本軍の妨害を避けて、アスリート飛行場のハンガー地区に集められた分捕り零戦。ハンガーのなかには、零戦や97艦攻のほかに、エンジンや部品なども運び込まれている。



⚡ Zeros were pulled to the hangar area of the field where the Americans could more easily guard them from sabotage by the Japanese. In the hangar are more Zeros, one KATE and many aircraft parts including engines.





Viewed from within the American captured hanger are rows of engines standing in front of Zero Model 52s. While under heavy gun and mortar fire, Americans retrieved this equipment from outlying position around the field.

〔上〕米軍が占領したハンガーの前に並べられた零戦52型とエンジン。日本の戦力を探る貴重な資料として、シートをかぶせて大切に保管された。日本軍の襲撃にそなえて、激重な警戒下におかれたという。このうちの何機かがアメリカに運ばれ、テストされた。





『上・左』船積みのために、米陸軍のクレーンでトラック・トレーラーに積込まれ、海岸へ運ばれる零戦52型。プロペラははずされているが、完全な状態である。尾翼と機首カウリング前下方に「03」の文字が書かれており、上の写真では主翼下面の主脚柱付近外方に導弾架ラックが見える。



↑↔ A U.S. Army crane lifts this propellerless Zero Model 52 onto a truck trailer for moving to the waters edge. Note the wing racks just outboard of the landing gear. Aircraft number "03" is painted low on the front of the engine cowl.



⚔ During the more than two weeks that this operation covered, Japanese frequently machine gunned and mortared the Americans and their captured equipment. This Zero shows the effects that the concussion of a mortar round can make upon its fuselage. Because of this, it may never have left Saipan although stenciled across its hinomaru for shipment were the words: To Chief of Naval Operations, OPNAV-1G, NAS Anacostia, D.C., Hangar 151.





✦ When the moving of the Zeros could be accomplished in reasonable safety from Japanese sniper fire, the airplanes were placed aboard flatbed trucks for the four mile trek to the beach for loading aboard the aircraft carrier USS Copahue.

〔左下〕米軍のサイパン島上陸後まもなく開始された約2週間にわたる“日本機分捕り作戦”のあいだ、日本軍の間断ない機銃や臼砲の攻撃になやまされた。左下の写真の機体は臼砲弾の直撃を受けたもので、機体は大破している。機体にはアナコスティア海軍航空基地行きと転送先が書かれているが、おそらくこのままサイパンにとめおかれたものと思われる。

〔左〕日本軍の狙撃を避けて慎重に運ばれる零戦52型。こらんのような特製のトラックに積まれて、海岸まで4マイル(6.4km)ほど運ばれ、空母コパヒー(USS Copahue)に積まれた。

〔下〕確保された零戦52型の1機。後方にL-5やP-47が見える。日本軍の夜襲で、P-47の近くにある燃料タンクが破壊され、火災を起したが、零戦はまじであった。

✦ In close proximity to this Zero photographed head-on are P-47s and a Stinson L-5. One night during this round-up operation, Japanese infiltrators punctured fuel tanks of the adjacent P-47 and set one on fire, but did not bother the Zeros.





〔上〕アメリカに運ばれた零戦52型。雪のライトフィールドで撮影。胴体は日の丸マークのままであるが、主翼には米軍機のマークをつけている。水平安定板前方の胴体に書かれている数字はシリアル。

〔下および右下〕空母コパヒーの飛行甲板に積込まれた零戦52型。潮風や海水のしそきからまもるために、エンジンと風防はシートでおおわれ、甲板上にしっかりと繋留固定されている。

↑ Snow covered ramp at Wright Field highlights many structural details of this captured Zero. While having the Japanese hinomaru on its side, it carries the U.S. star on its wing. Note the aircraft serial number reapplied forward of the horizontal stabilizer.

↓ After the USS Copahie was well out to sea with its deck of Zeros, they received a protective coating to guard against sea air and water, and engines and canopies were covered with tarpaulins.





↑ アメリカに運ばれた零戦1機のクローズアップ。この機体は、1944年2月末からマリアナ方面へ展開した海軍第261航空隊“虎”部隊の所属機であったもの。大戦末期のころは、日の丸マークの白フチは、目立ちすぎるため塗りつぶしている機体も少なくなかった。

↑ Close structural detail can be seen in this photo of ship number 126, formerly of the 261st Naval Air Corps. In the latter stage of the war, the Japanese often painted out the high visibility white circles around the hinomaru for better concealment.





(Photo by W.D. Erbeck)

WINGS OF 5TH AIR FORCE

B-24爆撃機部隊

第5空軍の傘下に入って太平洋戦を戦った爆撃機部隊は、第3、19、22、38、43、90、312、345、380、417の10個爆撃大隊で、各4個中隊の編成。このうち4発のコンソリデーテッドB-24爆撃機を装備したのは、第22、38、43、90、380爆撃大隊である。

このページと次ページの各機は、第90爆撃大隊(90th BG)の所属機。第90爆撃大隊「ジョイ・ロジャース」(Jolly Rogers)は、B-24Dリベレーターを装備してオーストラリアで編成され、1942年11月中頃から戦闘に参加した。当初は3個中隊であったが、翌43年2月10日にはポートモレスビーに移駐、同年6月に319中隊「アスターペリアス」(Asterperious)中隊を加えて、第320、321、400の4個中隊となった。第320は「モビイデック」(Moby Dick)、第400は「ブラックパイレーツ」(Black Pirates)のニックネームがつけられている。

第90爆撃大隊は、白いどくろとクロスした爆弾を部隊マークとしていたが、左の写真でそれがよくわかる。写真はすべて1944年夏頃から装備したB-24Jである。同年秋頃の撮影。

(Photo by Capt. P.J. Giguere)





(Photo by W. D. Erbeck)

第90爆撃大隊の各中隊は、1944年なかばすぎにB-24の
Dとし型に機種改定すると同時に、スコードロン・カラ
ーを採用、垂直尾翼全面（ラダーをのぞく）を第319は赤、

320はブルー、321はグリーン、400は黒で塗り、その上に
白いどくろと爆弾のクロス・マークを画くようになった。

(Photo by W. D. Erbeck)





(Photo by Capt. P.J. Giguere)

写真上は第380爆撃大隊(380th BG)のB-24Mリベレーター。終戦直後に沖縄で撮影したもの。1943年5月から戦闘に参加した第380爆撃大隊は、第528、529、530、531爆撃中隊(BS)からなり、当初はB-24のDとH型を装備していた。1944年ころには、部隊のニックネームを“フライング・サーカス”と称して、垂直尾翼に528と529中隊は象と道化師のマーク、530と531中隊の各機は丸い爆弾を持って弾にぶら下った猿の絵をスコードロン・カラーとして付けていたが、1945年からは大隊マークは頭のようにライオンの首に変わった。ラダーの中央部に付けられて帯はスコードロン・カラーに区別しており、530中隊が黄、531中隊は赤、528中隊は青、529中隊は白を採用していた。

写真左と下は第22爆撃大隊(22nd BG)のB-24。B-25ローダーを装備して1942年1月から戦闘に参加した第22爆撃大隊は、1943年にB-25に機種変更。翌44年1月にはまたたび改造してB-24HとJ型を装備した。大隊のニックネームは“レッドレイダーズ”(Red Raiders)で、1944年秋ごろからラダーの中央3分1部分を第2中隊はブルー、19中隊は白、33中隊は黄、408中隊はグリーンで色わけしたスコードロン・カラーを採用している。写真下は1945年に沖縄で撮影した第19中隊(19th BS)所属のB-24Jである。



(Photo by Clay Jansson)



Douglas DC-4. This aircraft opened the first landplane trans-Atlantic service on 23rd October 1945. Pan American owned seventy-six DC-4s in all.

第二次大戦がぼつ発、戦局が熾烈になると、パンナムは人員貨物の輸送で軍に協力すると同時に、陸海軍パイロットに、社が開発した海上長距離航法のノウハウを伝授。連合軍の洋飛石作戦では大いに資するところがあった。〔上〕終戦まもない1945年10月23日からパンナムの大西洋横断路線に就航したC-4。DC-4の軍用型C-54スカイマスターは、1945年9月から民間の航空会社に払下げられ各社で使われている。DCは大西洋横断路線に使われた最初の陸上輸送機でもあった。パンナムでは全部で76機を装備している。

〔下〕パンナムがDC-4につづいて、1946年1月14日から北大洋路線に使ったロッキード049コンステレーション。パンナムにつづいて、TWA、アメリカン・オーバーシーズ・エアラインなどがこの流麗なコンステレーションを装備。その後しばらく、民間旅客の長距離輸送界はコンステレーション時代を迎えることになる。パンナムでは本機を28機装備した。

〔DC-4データ〕エンジン：P.&W.R-2000（5,800hp）× 4、幅35.96m、全長28.65m、全備重量33,112kg、乗客数62-78

エアラインの翼

Pan Am's Planes

パン・アメリカン航空 ⑫

名、巡航速度309km/h、巡航高度3,048m、航続距離3,620km。
〔L.049コンステレーション・データ〕エンジン：ライトR-3350（8,800hp）× 4、全幅37.49m、全長28.95m、全備重量42,183kg、乗客数45名、巡航速度402km/h、巡航高度6,096m、航続距離4,827km。



Lockheed 049 Constellation. Pan American began trans-Atlantic service with this elegant pressurised airliner on 20th January 1946, replacing the flying-boats.

The world's first jet flying-boat Saunders-Roe SRA.1. Three prototypes were built. The first prototype, TG263, is illustrated here. East Cowes, July 1947.



サンダース・ローSRA.1は、原型1号機(TG263)、2号機(TG267)、3号機(TG271)の3機が造られたが、このページと次ページは1947年7月15日に初飛行した原型1号機。

搭載エンジンは3,300-lb (1,496kg)のメトロポリタン・ビッカースM.V.B.1ペリールが2基で、艇体の両側に装備。機首先端に楕円形の空気取入口を設け、主翼後縁付根の後方に



ジェット 軍用機の 先輩たち

イギリス篇 ④

サンダース・ロー SR.A.1
SAUNDERS-ROE SR.A.1

草創のジェット戦闘機では、いろんな形式のものが試みられたが、これもその変りだねのひとつで、単座双発のジェット戦闘飛行艇サンダース・ローSR.A.1。太平洋戦の日本軍を相手とするために計画された長距離の水上新機であったが、なんといっても重い艇体を持ついわゆる飛行艇であるだけに、速度、上昇力、機動性ともに陸上機にはかなわず、試作機3機が造られたのみに終わった。しかし世界で最初に飛んだジェット飛行艇として、記念すべき機体でもある。

(本文147ページ参照)

排気ノズルを突き出していた。空気取入口上方に20mmのイスパノMK.5機関砲を4門装備している。

